

---

# 最後の願い

宇野午葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最後の願い

### 【Nコード】

N7995C

### 【作者名】

宇野午葉

### 【あらすじ】

あなたの魂が消滅する時。あなたの、最後の願い、を叶えます。死神アルフの初仕事です。誤字・脱字等修正し、再投稿しました。内容に変更はございません。

## ある夏の日（前書き）

誤字・脱字等修正しました。  
ストーリーに変更はありません。

## ある夏の日

とうとう幻覚を見るほどまでに、自分の体が弱ってきたのか・・・？  
そう思いながら、突如として現れた侵入者から視線をはずせなかった。

「ヤマウチアキラ様ですね？」

突然現れた金髪碧眼の少年はそう言いながら、俺に向かってにっこりと微笑んだ。

俺は返事ができないでいた。

別に少女と見紛うほどの少年の可愛らしい風貌に見とれていた訳でも、喪服のような黒いスーツに黒いネクタイを、なぜか蝶々結びに結んでいる少年の奇抜さに目を見張った訳でもない。

もっと驚くことがその少年の背中にはあった。

金髪碧眼の少年は五階にあるこの病室に、窓から侵入してきたのである。

そう、少年の背にある、漆黒の翼をはためかせて・・・

「死神のアルフと言います。初仕事なので至らない点があると思いますが、精一杯頑張りますのでよろしくお願いします」

ベットから起きようとして固まった姿勢のままの俺をよそに、アルフと名乗る少年は新入社員の挨拶のように丁寧にお辞儀をした。

「しに、が、み？」

俺は擦れた声でその単語を反すうした。

「はい」

アルフは大きくうなずき、死神という陰気な言葉に似合わない元気な返事をした。

「そうか・・・俺、死ぬんだな」

俺は体の力を抜き、起こしかけていた上半身を再びベットに沈め、その言葉を静かに受け入れた。

このアルフという少年が本当に死神だとしても、薬漬けでイカレテしまった俺の脳みそが見せている幻覚だとしても、どちらにしろ、いよいよ自分の死期が近い事は確かだろう。

一年前、病が判った時は、ちょうど入籍しようと準備していた時だった。

幸せ絶頂の中で受けた診断は”余命半年”。

それでも、何度か手術を受け、薬で症状を抑え、騙し騙し命を繋げてきた。

最近是一人で思うように歩く事もできないほど弱ってきたこの体。死が確実に近づいてきているのは、自分が一番よく判っていた。

ただ・・・

ただ、気がかりなのは俺の何よりも大切に、愛しい存在。

「若菜」

無意識に愛しい人の名を呟く。

この病院の院長の娘で医者でもある若菜は、今年の春から小児病棟の担当になった。

子供好きの若菜の事だ、午後のこの時間は遊戯室で子供達に本を読

み聞かせているかもしれない。  
子供達に囲まれて、春の陽だまりのような柔らかな笑顔で笑う彼女を思い浮かべる。

「あの……。大丈夫ですか？」

黙りこんでしまった俺を心配してか、アルフがベットの近くに寄ってきた。

「ああ。大丈夫だ」

ベットから体を起こしてアルフを見れば、碧い瞳で心配そうに俺を見つめている。

コロコロと表情を変えるアルフは、とても幻覚とは思えない。

アルフの人懐っこい雰囲気も手伝ってか、俺はあっさりと少年の姿をした”死神”の存在を受け入れていた。

「それで？お前は俺を迎えにきたのか？」

俺の問いにアルフはふるふると首を振る。

「僕はあなたを迎えに来たわけではありません」

”じゃあ何しに来たんだ？”

口には出さなかったが、顔には出てたのだろう。アルフは言葉を続けた。

「僕はあなたの願いを叶えるために来たのです」

と。

## 死神の仕事

「消え行く魂を敬い、最後の願いを叶えるのが死神の仕事なんです。ヤマウチ様は最後に何を願いますか？」

アルフはベット脇にある椅子に座ると、碧い瞳で真っ直ぐ俺を見つめて問いかけた。

「消え行く魂・・・最後の願い？」

俺の呟きにアルフは軽く頷く。

「ヤマウチ様の魂はあと36時間22分後に消滅します」

「消滅？ 要は死ぬってことだよな？」

確認するように訪ねた俺にアルフは”ちょっと違う”を言いたげに小首を傾げる。

「魂は輪廻転生を繰り返しています。人が言う、いわゆる”死ぬ”と言う状態は次の転生のための準備期間に入ることを目指すのですが、魂の消滅の場合は違います。その言葉通り”消えて無くなる”ことを指します。魂というのは転生を繰り返すと徐々に摩耗し、魂の力が削られ、魂を維持する力も弱まって、やがては消えて無くなる・・・。ヤマウチ様の魂も、もう何回も転生していますから、魂の力も大分弱くなっているんです。今回の生で長く生きることができないのも、魂の力が弱いために、肉体を維持する力が足りないからなんですよ」



「要するに、俺の魂は使い過ぎてボロボロ。だから消えるってことか？」

「まあそんな感じです。それで魂を労う意味も込めて、ヤマウチ様のように長く転生を続けてきた魂が消滅する際に、ボク達死神が願いを一つだけ叶えるんです」

「それってどんな願いでもいいのか？」

「死神の力の及ぶ範囲の願いであればですけど」

「じゃあ”死にたくない。もっと生きたい”って願いは有りなのか？」

「それは無理です。死神の力は魂に影響を与えることができません。魂の力に干渉したり、人の魂を奪ったりということは死神にはできないのです。ましてや魂の消滅を止めるなど、死神や天使はもちろん、神ですらもできません」

アルフははっきりと言い放った。

「じゃあ何ができるんだよ」

イラつく心を隠さずアルフに言葉を投げつけた。アルフの穏やかな口調が、俺の神経を逆撫でしたからだ。

「死に逝く者が”生きたい”と願う他に、望みなんかあるもんか！”願いを叶える”だなんて希望を持たせるようなことを言ったって、一番の望みを叶えられないなら、何の意味も無いじゃないか！」

俺は声を荒げアルフを睨みつける。碧い瞳は俺の心を見透かすように、ただ黙って静かに俺を見ている。

そう、これは完全に八つ当たりだ。なんだかんだ言っても結局俺は死ぬのが怖いのだ。

それをこんな風に人に当たるなんてかつこ悪い。俺はいたたまれなくなつてアルフから視線を外した。

「長く生きられないのは分かっているんだ。ただ若菜と・・・彼女と離れる事を考えると、苦しいというか何というか・・・」

いい歳して情けないよな。

独り言のように呟くと、力ない笑が混み上げてきた。

そんな俺を、アルフは今にも泣きそうな顔で黙って見ている。

気まずい沈黙。

やがてアルフは自己嫌悪に陥り俯く俺に、優しく諭すように言った。

「魂に関する事以外の願いなら叶えることができますから」

”生きたいと”生を望む以外の願い・・・他の願いだなんて何かあるだろうか。

「ヤマウチ様の魂が消滅するまでまだ少し時間があります。焦らずに考えて、願いが決まったら僕に教えてください」

「わかった」

俺は一言答えると、なんとなく窓の方に視線を向けた。

アルフが侵入してきた窓は、しっかりと閉められていて、白いレースのカーテンから夏の午後の強い日差しが漏れている。

一人部屋の病室は適度に空調が効いていて、全く季節感が無い。

あと36時間の命。

短いと言えば確かに短い。それでも何も知らずにいきなり死を迎えるよりは、この36時間を有意義に使えるはずだ。

そう思うと、少し心に余裕が出てきた。

俺は気まずい雰囲気拭うように、わざと声のトーンを上げてアルフに聞いてみた。

「なあ、他の人たちってどんな願いを叶えてもらってるんだ？」

「そうですねえ、先輩達の話だと”空を飛んでみたい”とか、好きな食べ物を”おもいっきり食べたい”とか、”沢山のお札に埋められたい”っていうお願いがあったらしいです」

アルフも明るく答え、にっこりと微笑んだ。

アルフの笑顔は、若菜の持つ陽だまりの雰囲気によく似ている。だいぶ落ち着いてきた俺に、湧き上がった素朴な疑問。

「消滅する死と、転生する死。それは俺にとって何の違いがあるんだ？」

転生するにしても、”今の俺”が死ぬのには変わらない。”今の俺”が前世を覚えていないように、たとえば来世があったとしても、”来世の俺”は（もしかしたら女かもしれないが）”今の俺”を覚えていないはずだ。

だったら、消滅するにしても、転生するにしても、”今の俺”が居なくなることはない。

そんな俺の考えを見透かしたようにアルフは答える。

「魂にも”記憶”があります。たとえヤマウチ様が覚えていないと思っても、ヤマウチ様の魂が今までの”生”で逢った、他の魂との結びつき記憶しています。例えば、ヤマウチ様が彼女と出会い、大事に思っているように、前世のヤマウチ様の魂もまた、彼女の魂との結びつきがあったはずです。魂はその結びつきがあるもの同士で”生”を紡ぎます。魂が消滅することで、他の魂との関係性が一旦崩れることもありますが、新しく魂が産まれたり、今まで関連の無かった魂が加わったりなどして、新たな”生”を紡いでいくものなのです」

神妙な顔つきで話すアルフは、最初の印象よりずっと大人びて見えた。

「そっか。転生するってことは、今までの生を、記憶を受け継いでいくってことなんだな」

この言葉は、自分の口から出たとは思えないほど、静かな口調だった。

俺の魂が消滅してしまえば、今まで魂が紡いできた生も、俺の若菜への気持ちも消えてしまう・・・

それは哀しいとか寂しいとか、そんな言葉で片付けられるようなものではなかった。

## 愛しい人

「俺ってさあ、愛人の子供なんだよ」

何の脈絡もなく俺はアルフに語りかけた。なんとなく沈黙が気まずかったから。

いきなり話始めた俺にアルフはきよとんとしていたが、俺は構わずしゃべりだした。

「母さんはさ、俺が5歳の時に死んだんだ。それでピアノの先生をしていたばあちゃんの所に引き取られんだ」

アルフは俺の話を黙って聞いている。

「俺の親父にあたる人は、俺が生まれてからずっと生活するのに十分な金を与えてくれてたようだけど、成人するまでは会ったこともなかったな」

「俺と若菜は幼馴染ってやつでさ。初めて会ったのは7歳の時で、若菜がここの院長先生の養女になってすぐの頃で、俺のばあちゃん家にピアノを習いに来たのがきっかけだった」

「初対面の若菜の印象は、”変な子”だったんだよ。若菜は庭にある木の下でピョコピョコ跳ねてたの。ずっと、ぴょんぴょん跳ねて、息切らして座り込んで、何やってんだコイツ？みたいな」

「んで、俺は気になって若菜に声をかけたんだよ。何してるの？って」

俺は自分が何をしゃべりたいのか良く分からないまま言葉を繋ぐ。  
きっと誰かに自分の事を知ってほしい、覚えていてほしいと無意識  
に思っているからだろうか。

こんな事をして、何の意味も無いのに。  
それなのにアルフは笑顔で話の続きを促す。

「若菜さんは、なんて応えたんですか？」

「花が欲しいって」

「花、ですか？」

「そう。その木にさ、白い花が咲いてたんだよ。それが欲しいって」

コンコン

不意に、ドアをノックする音が病室に響く。

俺の返事を待つことなくドアは開かれ、ひょっこりと顔を出したのは白衣姿の若菜だった。

「晃、ケーキ食べる？」

満面の笑みを浮かべながら、紙皿の上のったケーキを俺の目の前に差し出す。

突然の若菜の訪問で困惑しながらも俺は紙皿を受け取る。

「って、これケーキか?!」

そこに山盛りで置かれているのは、生クリームとイチゴのデコレーションケーキだったであろう物体。

形が崩れすぎて、一瞬見ただけでは何なのか判別しがたいものになっていた。

「今日は省吾くんと優香ちゃんのお誕生会だったからケーキ作ってきたの」

そう言いながら若菜は先ほどまでアルフが座っていたベット脇の椅子に座る。

アルフはいつの間にか椅子とは反対側の窓辺に立っていた。

” 若菜にはアルフが見えてないのか？ ”

俺以外の人物が病室に居るのに、若菜はなんのリアクションもしない。

ということは若菜にはアルフが見えていないのだろう。

やっぱり幻覚なのかなぁ・・・などと考えていると。

「ほらぁ、食べないの？」

と、若菜が上目遣いで俺を見上げる。

若菜のこういう仕草が凄くかわいいと思う。

俺、ケーキより若菜のことが食べたいんだけど。

とは言えず、黙ってケーキに目を向ける。

「なんでこんなにケーキがグチャグチャなんだ？」

フォークでケーキだった物体を突っつきながら若菜に訊ねる。

「子供達がね“ 晃お兄ちゃんの分も” って取り分けてくれたのよ」  
なんか想像つく。

優香ちゃんが慎重にケーキを皿に載せようとしてるところを、省吾や大輝が邪魔をしたってところだろう。  
俺は苦笑しながらもケーキを口に運ぶ。

「うん、うまい！」

形はどうあれ、お菓子作りが得意な若菜のケーキはおいしい。  
ましてや子供達が俺を気に掛けてくれているという話を聞いたら尚更である。

この病院の小児病棟は長期入院の子供が多い。

子供好きの若菜につられ、昔から暇があれば若菜と二人でよく小児病棟に顔を出しては子供達と遊んでいたのだ。

子供達の笑顔を思い出し上機嫌でケーキを食べ終え、若菜が入れてくれた麦茶を飲む。

そんな俺を若菜は穏やかな表情で黙って見ていた。

アルフの時のように沈黙が苦にならないのは、二人の間に流れている温かな空気を感じるから。

” 側に居るだけでも感じる幸せ” 俺の自惚れではなく若菜もそう思っているのは表情からも見てとれる。

ずっとこうして若菜の側に居られたら・・・  
でもそれは叶わぬ願いだ。

行き場の無いこの気持ちに、無意識に縋るように窓辺に立つアルフに目を向ける。

アルフは哀しそうな顔で小さく首を横に振る。



俺の思いを察したようで、それを叶える事はできないという意味で首を横に振ったのだろう。

わかってる。

わかっているさ。

俺はもうすぐ死ぬ。

消えてなくなるんだ。

俺は、ただ黙って窓辺に立つアルフから、視線を外せないでいた。

アルフを見ていた俺に釣られるように、若菜も窓の方へ視線を向ける。

窓辺に立つアルフの金髪は薄いカーテン越しの夏の日差しを受けて、キラキラと銀色に輝いていた。

その柔らかい輝きに似合わない憂い顔で、アルフは若菜に視線を向けている。

だが、若菜は何の反応も示さない。

むしろ普段から穏やかな笑みを浮かべている若菜にしては珍しく無表情だ。

若菜の瞳はアルフを素通りして外の景色を見ているのだろうか。  
やがて、

「ねえ、今日はここに泊まってもいい？」

視線を窓に向けたまま若菜が言った。

若菜が病室に泊まりたいなんて言ったのは初めてだ。

この病院は身内でも夜間の付き添い看護を原則禁止している。  
それを若菜もよく知っているからだ。

「どうしたんだ、急に？」

若菜はゆっくり立ち上がると、いつもの柔らかい笑みを浮かべ、

「明日は夜勤だから、そのまま仕事の時間までゆっくり晁と一緒に居れるし。ね？いいでしょ？」

お願い！なんて言いながら顔の前で手を合わせて俺の表情を伺う若菜。

そんなかわいい顔でお願いされたら断れないし。

それに若菜と一緒に居られるのはこれで最後かもしれない。

でも・・・

「夜間の付き添いは禁止だろ？医者がそんな勝手なことしていいのか？」

「あら。医者だから出来るのよ」

ふふふっと得意げに笑う若菜。

「職権乱用かよ」

俺は呆れて苦笑しつつも、院長の許可はもらっておけよ！と言ってOKサインをだした。

「それより、とっくに休憩時間過ぎてるんじゃないか？」

俺の言葉に、はっとしたように腕時計に目をやる若菜。

「まずい！」

バタバタと紙皿やカップを片付け、じゃああとでね。と言い残し若菜は慌しく病室を出て行った。

アルフはしばらく若菜が出て行ったドアを見ていたがやがて、

「僕も失礼します。また後で改めて伺います」

と、にっこり笑って最初に病室に入ってきたときと同じように、黒い翼を羽ばたかせて窓から出て行った。

静かだ・・・。

一人になって、いろいろと考える事があるはずなのに、今の俺の頭の中は真っ白だ。

”死”が確実に目の前にあるという事実は、思っていた以上のショックを俺に与えたようだ。

あと一日半の命で何ができる？

何も思いつかないまま、気ばかりが焦る。

特に何の意味も無く、それとも無意識のうちに私物の整理でもしようと思ったのか、おもむろに備え付けのクローゼットを開けてみたりした。

服の他に1年の闘病生活で溜まりに溜まった雑誌やゲームソフトなど、適当に放り込んであったものを手当たり次第引っ張り出す。ふと、目に入った植物図鑑。

「こんなもの持ってきてたっけ？」

さまざまな植物を写真付で載せている分厚い図鑑は、確かに幼い頃に自分の家にあったものだ。

何気なく図鑑を開くと、開いたページに何か挟まっている。

茶色く変色した子供の手のひらくらいの大きさのそれは、元は白い

花だった。

白木蓮。

若菜との思い出の花。

初めて若菜に会ったときに咲いていた花だ。

空に向かって真っ直ぐに咲く白く美しい花と、  
若菜の笑顔を思い浮かべながら俺はゆっくりと凶鑑を閉じた。

## 二人の夜

消灯時間間際。

ドアをノックする音が病室に響く。

「どうぞ」

俺が返事をすると思顔で若菜が病室に入ってきた。

「ごめんね。着替えを取りに一回家に帰ったら、すっかり遅くなっちゃって」

そう言いながら、ベッドの上に胡坐をかいていた俺に並ぶように、若菜がベッドに腰掛ける。

ふわりとシャンプーの香りがした。

「若菜はトロいからなあ。それより髪がまだ濡れてるんじゃないか？ 風引くぞ」

日中とは違って、おろしたままになっている若菜の長い髪に指を絡ませる。

「大丈夫だよ。そんなに柔じゃないもん」

若菜は子供のように口を尖らせて応える。

そこに、再び病室に響くノックの音。

「どうぞ」

「失礼します」

ガラガラと何か引きずるような音と供に入ってきたのは婦長の木村さん。

どうやら折りたたみ式の簡易ベットを持ってきてくれたようだ。

「これ使ってください。でもベットから落ちて怪我しないでくださいね」

婦長は真顔で若菜に注意を促す。

「私そんなに寝相悪くないですから！」

若菜は否定するが、はっきり言って若菜、君の寝相は相当悪いぞ。

「いつも仮眠用のソファから落ちてるのは誰でしたっけ？」

俺と同じ事を思っているだろう婦長の発言に、若菜が”うっ”と言葉を詰まらせた。

「とにかく、もうすぐ消灯時間です。夜更かしはしないで静かにしてくださいね」

そういつて婦長は、若菜に毛布を渡す。

「はい」

と、子供のような返事を二人で婦長に返し、出て行く婦長に手を振った。

くだらない事を小声で話し合い、  
声を押さえて笑い、

巡回の看護師が来たら寝たふりをし、  
まるで修学旅行の時のように、ドキドキしながら若菜との会話を楽しんだ。

やがて、若菜があくびをし始めた。

「そろそろ寝ようか」

俺がそう言っていると、若菜はコクリと頷き、俺のベットに潜り込んできた。

「おい、狭いぞ」

そう言いながらも俺は体をずらし、若菜が寝れるようにスペースを空けると、抱き合うような形で、若菜は俺の腕の中に体を収める。

「相変わらず若菜の足は冷たいな」

冷えた足先を俺にくっつけてくる若菜を軽く抱きしめた。

若菜はもぞもぞと俺の足の間に自分の足先を入れながら答える。

「足が冷たいと眠れないんだもん。あたしが寒がりなのは晃も知ってるでしょ？」

そういえば一緒に住んだ頃は、よく冷え性の若菜がカイロ代わりに俺にくっついてきてたっけ。

それももうずいぶんと昔の事のような気がするくらい、若菜を抱きしめた感触がひどく懐かしかった。

「まだ夏なのに今からそんなに冷えてたら、冬はどうするんだよ」

俺は苦笑しながら、さらさら若菜の髪に指を滑らせるように頭を撫でる。

「晃の側に居れば、寒くないもん」

若菜が抱きついてくる。

背中に回された若菜の手が、俺のパジャマをぎゅっと掴んだ。

「晃が側に居れば寒くない。だからね、ずっとこうして側にいて、あたしを抱きしめて」

若菜は俺の腕の中で震えて泣いていた。

若菜も医者だ。

俺の病気が再発した時点で、長く生きれない事を覚悟していたはずだ。

それでもいつも変わらず、明るく穏やかな表情で俺の闘病生活を支えてくれていた若菜がこんな風に泣くなんて・・・

ごめんな若菜。

俺は側に居てやれない。

俺、明日死ぬんだ。



やりきれない思いを押し込め、俺は若菜に優しくキスをした。

## 最後の日

朝。

目覚めると、若菜はすでに身支度を整えていた。

いつも通り柔らかな笑顔で、朝の挨拶をする若菜の目がまだ少し紅いのに気づいて、俺の胸が苦しくなった。

「調子悪いの？もう朝ご飯の時間だけど、食べれる？」

目を開けても中々起き上がらない俺を、若菜は心配そうに覗き込む。

「大丈夫だよ。むしろ今日は調子がいい」

だた寝相の悪い若菜の足蹴りをまともにくらって、あっちこっちズキズキ痛むけどね。

とは言わないで置いた。

「じゃあ、ご飯とってくるね。ついでに検温の準備もしてくるから、その間に着替え済ませちゃって」

そう言いながら若菜は病室を出て行った。

着替えといってもパジャマからジャージに着替えるだけの簡単なものだ。

手早く着替えを済ませ、病室に備え付けの洗面台で顔を洗い終わると、それを待っていたかのように、何も無い空間からアルフが現れた。

「おはようございます、ヤマウチ様」

昨日と同じ、黒のスーツに黒のネクタイを蝶々結びにした格好のアルフはにっこりと微笑む。

「今日は窓から入ってこないんだな」

俺はアルフに挨拶を返すと、素直に疑問に思ったことを聞いてみた。急にびっくりしたように、後ずさるアルフ。

「あっ・・・あの、それはですねっ！えっとおくそのお」

「どうした？」

俺は訝しげに眉を寄せアルフを見る。

「いいえ！ないんでもありません！！」

アルフは真っ赤な顔でブンブンと首を横に振る。  
なんなんだ？

首を傾げる俺に、アルフは急に話題を替える。

「とことで”最後の願い”は、決まりましたか？」

「ああ」

俺は短くそう答える。そろそろ若菜が戻ってくる頃だ。

俺は手短かにアルフに願いを話すと、アルフは俺の願いを叶えるために、黒い翼をはためかせ窓から飛び立って行った。

朝食後は、昨日の夜更かしが祟ったのか、睡魔に負けて若菜と昼

食の時間まで眠ってしまった。昨日は少し無理をし過ぎたみたいだ。午後は若菜と共に小児病棟へ行き、子供達と賑やかで楽しいひと時を過ごした。

夕飯後から消灯までは、戻ってきたアルフとテレビゲームをして過ごした。

深夜2時。

もう、そろそろか。

「アルフ」

暗い空間に呼びかけると、アルフが現れる。

金色に輝く髪は、こんな薄暗い部屋の中でも神々しい光を纏っていたが、蝶々結びの黒いネクタイがその神秘的な雰囲気上台無しにしていた。

「そろそろ時間だよな」

俺の声に、アルフは首を縦に振る。

「あっちの方は大丈夫か？」

「はい」

神妙な顔でまた首を縦に振るアルフ。

ちなみにあっちとは、俺がアルフに託した最後の願いのことだ。

「ところでさ、願いとは別にアルフに頼みがあるんだけど・・・いいか？」

俺の言葉に三度頷いたアルフを見て、俺はたった今書き上げた一通の封筒をアルフに渡す。

「若菜に書いた手紙なんだけどさ」

「若菜さんに渡せばいいんですね？」

売店で買った安くさい封筒を、大事そうに胸元にあてアルフが柔らかに微笑む。

「いや。やっぱ渡さなくていい！」

勢いに任せて書いた手紙の内容を思い返し、急に恥ずかしくなった。顔が火照ってるのが自分でも分かる。

手紙を取り上げようと手を伸ばしたが、アルフはひらりを身をかわす。

「そんなに照れなくなたっていいじゃないですか」

意地悪くニヤニヤと笑いながら手紙を後ろ手に隠すアルフ。

俺、頼む相手間違えたかな。

「第一この手紙を渡さないと、ヤマウチさまの願いのために駆けずり回った僕の苦勞が報われません」

そう言ってアルフは頬を膨らます。

「それにすっごい悩んで書いてじゃないですか！その勞力を無駄にしちゃいけません！」

と、にっこりと微笑む。

ってアルフ、お前覗いてたのか。

姿を隠して部屋に居たから窓から入って来なかったのか!?

俺はやれやれと大げさにため息をつく。

不意に視界が揺れた。

「・・・っ」

息ができない。

反射的に喉元に手をあてる。

不思議と苦しくはなかった。

『ああ、もう時間切れか』

冷静にそう思った。

「ヤマウチさま!」

アルフが俺のを呼んでるのが聞こえる。

『大丈夫だ』

そう言おうとしたが声にならない。

それに、今から死ぬのに”大丈夫”はおかしいか?と思い直す。

苦しく感じないのは、魂（意識）が体から離れかけているからか?  
なんて冷静に考えてみる。

死とは意外とゆっくり来るんだな・・・

目の前で揺れる蝶々結びの黒いネクタイ。

淡く輝く金色の髪。

涙を湛えた碧い瞳。

アルフは必死に俺に呼びかけている。

『死神が死ぬ人間見てびびってるじゃねえよ』

そう言いつたつもりだが、アルフには届いてないだろう。

やがて、意識が闇に引きずられるような感覚が俺を襲う。

ああ、これで終わりだ。

『ありがとな、アルフ』

それから、

『さよなら、若菜・・・』

## さようなら（前書き）

若菜視点で物語が進みます



## さようなら

胸騒ぎがした。

居ても立ってもいられなくて、院長に断りを入れて医局を出る。すぐに3階に上がり、一般病棟への渡り廊下を急ぎ足で渡る。気持ちばかりが焦って、走っても走っても進まない。

自分の足音だけが廊下に響く。

薄暗い廊下の前方は真っ暗で、夢の中に居るようで現実味が無い。やっと目的の病室に辿り着き、勢いに任せて引き戸を開ける。

薄暗い病室の中。

静かに瞳を閉じてベッドに横たわるあなた。

その側に佇む金色の光を纏った少年。

「・・・何、してるの？」

その少年に向けて、やっと絞り出した私の声はひどく掠れてた。

少年は何も言わず黙って私を見ている。

その碧い瞳にあるのは、ただただ深い悲しみ。

背筋がざわついた。

私は弾かれたように晃のもとに駆け寄る。

すぐに晃の首元に手をあて脈を確認する。

「!!」

今度は布団をどけ、パジャマを肌蹴て胸元に耳を寄せる。

反射的にナースコールを押し、心肺停止な旨を伝え必要な器具を要請する。

気道を確保し口から直接空気を送り込み、心臓マッサージを施す。

一連の動作はスムーズで、医局を出たとき同様に現実感が無い。

そうよ。

これは、夢。

悪い夢よ。

やがて一般病棟の担当の医師や看護師がやってきて、狂ったように心臓マッサージを繰り返す私を晃から引き離す。

医師がなにやら看護師に指示をし、晃の腕に注射を刺す。

私はその様子を床に座り込んだまま見ていた。

ふと、その奥に居る金髪の少年が目に入った。

途端に湧き上がる恐怖。

晃を失うという恐怖。

「駄目よ！連れて行かせない。晃を死なせはしないわ!!」

私は必死になって金髪の少年に向かってそう叫んだ。

少年に掴みかかろうと立ち上がるが、足が縛れて転びそうになる。

誰かが支えてくれた。

目の前にある蝶々結びの黒いネクタイ。

あの少年だ！

私は反射的に顔を上げる。今にも泣き出しそうな碧い瞳が、まっすぐ私を見ていた。

「ごめんなさい」

少年が口を開いた。

「ごめんなさい。僕にはどうすることもできないんです」

私は、何も言えずにいた。

誰にも、どうする事ができない事はよく分かっている。

晁の病気が分かった時にこうなる事も覚悟していた。

そう。

覚悟はできていたはずなのに。

だからって

”はい、そうですか”

なんて言えない。

晃の死を受け入れる事なんて、できない！

私は、泣いた。

晃を奪われる怒りと、

晃を失う悲しみと、

晃を愛おしく思う気持ちと、

晃と一緒に過ごした日々への感謝と・・・

さまざまな感情が溢れ、自然と涙が出た。

『さよなら、若菜・・・』

耳元で晃の声が聞こえた気がした。

## 感謝の言葉（前書き）

若菜視点で物語が進みます。

## 感謝の言葉

眩しい光で目を覚ます。

窓から夏の日差しが降り注いでいた。

どうやら私は、空いている病室に寝かされていたようだ。

『さよなら。若菜・・・』

聞こえるはずの無い晃の声が耳に残っている。

涙が一筋流れた。

しばらくしてベッドからゆっくりと起き上がる。

するとタイミング良く病室の扉が開いた。

扉を開けた白衣を着た白髪の男性は、黙ってベッドの脇の椅子に腰を掛ける。

「ご心配おかけしました、院長」

私はベッドに座ったまま頭を下げた。

「こういう時は、お父さんと呼んで欲しいな」

白髪の男性は目を細めて、私の頭を撫でる。

「ごめんなさい。お父さん」

頭を撫でられたまま素直に謝る。

「晃君のお父さんの代理の方が来てるんだが、会うかい？」

私は頭を下げたまま黙って首を横に振る。

用件は晃の葬儀についての事だろう。

晃のお父さんは世界経済に影響を及ぼすほどの企業の会長だ。例え愛人の子供でも、それなりの葬儀をしなければ世間体も悪いだろう。

そんな上辺だけの気持ちで、晃に接して欲しくは無い。だが身内でもない私には何もできないのだ。

「大丈夫だよ」

黙って俯く私の気持ちを察したのか、父はあやすように私の背中をポンポンと叩いて言った。

「若菜は晃君の婚約者だ。晃君の葬儀は私達に任せてもらえるように先方に話そう」

父は微笑むと、静かに部屋を出て行った。

「何か用？」

父の背中を見送った視線を、窓辺に向ける。

そこには喪服のような黒いスーツに黒いネクタイをなぜか蝶々結びに結んだ、背中に黒い羽が生えている金髪碧眼の少年が居た。

「僕のこと見えるんですね？」

少年は確認するように私に尋ねる。

「あなたのように翼がある人を何度か見たことがあるわ。白い翼で日本人形のような女の子だったけど」

両親が事故で死んだ時。

研修医の時、受け持った患者さんが息を引き取った時。

この病院へ来て初めて担当したオペの時・・・

白い翼の記録は、いつも死とともにあった。

「そうですか、あなたは天使も見えますね」

少年はひとり感心したように頷いている。

そんな話はどうでもいい。

「晃はどうなったの？ちゃんと天国に行けた？」

死後の世界なんて信じてないけど、聞かずにはいられなかった。

私の問いにしばらく間を空けて、少年はしっかりと首を縦に振った。それから思い出したようにジャケットの内ポケットから封筒を取り出した。

「ヤマウチ様より若菜さんに渡すように頼まれたんです」

少年が差し出すそれをゆっくりと受け取る。

震える手で中の便箋を取り出すと、晃の癖のある大きな文字が目に見え、飛び込んできた。

（若菜へ）



若菜がこの手紙を読む頃には、俺はこの世には居ないでしょう。

優しい若菜はきっと俺のために泣いていると思います。

でも俺は若菜には泣いてほしくありません。

どうか笑って。

俺のことなんか忘れちゃっていいから。

俺の大好きだった笑顔の若菜で居てください。

いままで一緒に居てくれてありがとうございます。

どうか幸せに。

ほんとにありがとう。

俺のことは忘れて。

どうか幸せになってください。

それが俺の願いです。

く晃よりく

短い手紙。

涙で霞む目で、ゆっくりと文字を追っていった。

晃が傍に居ないのに、私幸せになんてなれないよ。

「晃を忘れるなんて、無理よ・・・」

泣き崩れた私に、少年はハンカチを差し出しながら言った。

「忘れろなんて書いてあったんですか？ ヤマウチ様も無理しちゃって」

少年はため息まじりに言葉を続ける。

「若菜さん。ヤマウチ様は本気で忘れて欲しいなんて思ってませんよ。忘れて欲しいのなら、あの場所を若菜さんに残すわけないですよ？」

あの場所？

少年の言葉が気になって顔を上げると、目の前には書類のようなものがある。

これは・・・土地の権利書？

どういう事が説明してほしくて少年の顔を見ると、柔らかな笑顔がそこにあった。

「ヤマウチ様は最後の願いとして、ヤマウチ様が所有していた土地に、家と一本の木を再現してくれと言いました」

「家はヤマウチ様のおばあ様の家で、白い花が咲く木は若菜さんと初めて会った思い出の木だと聞きました。土地はもちろん家も若菜さんの名義になっています。忘れろなんて言うクセに思い出の場所

を若菜さんに残すんですから、本当は忘れて欲しくないですよ。  
ヤマウチ様も結構女々しい性格なんですね」

少年はクスクス笑っている。

ホント。晃ってば格好つけちゃって。

家を残すって事は、ここに住めってことよね。

あの家に住んでたら、晃のこと忘れること出来ないじゃん。

だってあの家には晃との思い出が沢山あるのよ？

だいたい私が晃を忘れたら、晃は寂しくて泣くでしょ？

そもそも、忘れろなんて言われて

”はい、そうですか”

なんて私が言うこと聞くとおもうっている時点で、晃の考えは甘いわ。

私、晃のことは絶対に忘れない。

晃と過ごした日々は、楽しくて愛しい私の宝物だもの。

「今まで一緒に居てくれてありがとう」

晃への感謝の言葉が、自然と口をついて出た。

愛しい気持ちを教えてくれた晃への感謝の言葉。

そして、”これかも一緒に居てね”と思いい出の中の晃に告げる。

それからもう一人。

「あなたも、ありがとう」

少年に向かって微笑む。

少年は碧い瞳を細めニッコリと微笑み返すと、深くお辞儀をして窓から飛び出して行った。

そう、少年の背にある、漆黒の翼をはためかせて・・・

## 白木蓮の下で

「ママあゝ」

庭で娘が大きな声を出している。

やれやれ。今日は何だろう？

綺麗な花でも見つけたのか、それとも珍しい鳥か虫でもいたのか。

「ママ、早く」

「はいはい、今行くわよ」

ちょうど飾り付けの終えたケーキを冷蔵庫にしまいながら、軽くため息をつく。

まったく誰に似てこんなにお転婆なのかしら。

この前、冬眠中の蛙を持って帰って来た時には、ひっくり返りそうになったわ。

そういえばあなたは昔、蛇を持ってきて私を驚かせた事があったっけ。

まあ、あれに比べれば全然マシよね。

私がテラスから庭に出ると、娘が駆け寄ってきた。

「ほら、見てママ」

と、一本の木を指差した。

娘が指差す先には、春の陽射しに煌めく白い花が、空に向かって真っ直ぐに咲いている。

白木蓮。

あなたと私の、思い出の花。

あの頃と何も変わらない、白く煌めく花。

ねえ、あなた

私、幸せよ。

あれから四年。

いろんな事があったけど

私、幸せよ。

この花の下で、あなたに出会えたこと

あなたと笑い会えたこと

いつも優しく抱きしめてくれたこと

あなたを愛したこと

あなたに愛されたこと

最後の日に、あなたの子供を授かったこと・・・

苦しいことも、悲しいこともあったけど、

あなたとの思い出が詰まったこの花と、この子が居るから・・・

いつまでも忘れない

忘れる事なんてできない

私の幸せは、今も変わらずあなたと共にあるもの。

今までも、これからも、

愛しているわ

晃・・・

## 白木蓮の下で（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。

わかりづらい部分もあったとは思いますが、ニュアンスで感じとってください（笑）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7995c/>

---

最後の願い

2011年8月28日21時50分発行